

—Essay—

文学とキリスト教の狭間で

濱中 久美子

Zwischen der Dichtung und dem Christentum

Kumiko HAMANAKA

Osaka University of Pharmaceutical Sciences, 4-20-1, Nasahara, Takatsuki, Osaka 569-1094, Japan

(Received October , 2009; Accepted November , 2009)

In diesem Essay wird mein bisheriger Forschungsgang über deutsche katholische Dichterin Gertrud von le Fort dargestellt. Professor Uichi Kimura, mein guter Lehrer, hat mir die Werke le Forts gezeigt und vorgeschlagen, sie genau zu untersuchen. Von ihrer christlichen Liebe fasziniert, wählte ich ihre Werke als Forschungsgegenstand.

Le Fort ist Konvertitin, die vom Protestantismus zum Katholizismus übergetreten ist. In ihrem Essay findet die enge Beziehung zwischen ihrer Dichtung und dem Christentum wiederholt Erwähnung. Nach ihrer Behauptung hätten die Dichtung und das Christentum ein gleiches oder ähnliches Ziel, die Sympathie für Gescheiterte und zum Strafe Verurteilte bzw. das Erbarmen mit ihnen, vorzuführen.

In dem vorliegenden Essay geht von der Frage aus, aus welchem Grund ihre Dichtung und das Christentum miteinander verbunden werden. Zunächst werden Unterschiede zwischen der katholischen und protestantischen Lehre genauer betrachtet. Ferner ist auch die Verschiedenheit der beiden Kirchen zu analysieren. vor allem anhand von ihren Einflüssen auf Zeitgenossen le Forts.

Schließlich stellte sich heraus, dass diese Behauptung le Forts auf chaotische strenge Sozialzustände nach dem ersten und zweiten Weltkrieg zurückzuführen ist.

Die Genossen le Forts lebten vergeblich mit erbärmlichen Gefühl, so dass sie mit einer tief gefühlten Solidarität ihre Genossen ermutigte, um ihre Not und ihr Leben als bedeutungsvoll erkennen zu lassen. Außerdem wurde in ihren Werken angedeutet, dass ihre Genossen durch die währende christliche Liebe getröstet werden können.

Die katholische Kirche verwies aber ihre Ausdrucksweise in Bezug auf die christliche Liebe. Denn sie wurde betrachtet, dass sie von der katholischen Lehre abgeht.

Der christlich- mystische Gedanken le Forts wurde von Professor Shintani an der Kansai Universität aufmerksam gemacht. Nach seinem Hinweis wurde dann hier die Beziehung mit ihren Freunden le Forts präziser aufgefasst, z.B. Philosoph und Theologe Ernst Troeltsch, Philosophin und Karmelitin Edith Stein sowie Jesuit Erich Przywara, der le Fort Mystizismus unterrichtete, um die Bedeutung ihres Ausdrucks klar zu machen. Aus meiner Analyse wurde wie folgt schlussfolgert: Der christliche Mystizismus der Karmelitin Edith Stein liegt ihrem Liebesausdruck zugrunde, der von der Kirche als ketzerisch ermahnt wurde. Ebenso viel wie le Fort wurde m. E. Erich Przywara von Edith Stein beeinflusst. Ernst Troeltsch, den le Fort lebenslang verehrte, schaffte ihre christlich - mystische Grundlage.

Des Weiteren wurde untersucht, ihre Motivierung zur Konversion zu verdeutlichen, damit ihre Dichtung noch verständlicher macht.

Ihrem Essay lässt sich entnehmen, dass le Fort die katholische Kirche als Mutter des Protestantismus anerkannte.

Sie war tief beeindruckt von der toleranten geistigen Liebeshaltung der katholischen Zeitschrift «Hochlands», die sie 1924 kurz vor ihrem dichterischen Debüt unerwartet traf.

Vermutlich hielt sie die christliche Liebe für eine ewig währende Liebe. Die herrührende protestantische Lehre sei nicht anders als die katholische.

Als Zusammenfassung des vorliegenden Essays wurde kurz erläutert, warum le Fort die Legenden und Mythen als Stoffe ihrer Dichtung bearbeiten sollte. Aus ihrem Essay entnommen, bleibt sie immer weit entfernt von der Wirklichkeit und versuchte sie, Geschehen wesentlich sowie objektiv festzustellen.

Stichwörter—Gertrud von le Fort; Dichtung; Christentum; Mystizismus; Konversion

0. はじめに

この随想において、私はこれまでの研究の軌跡を総括的に辿ってみたいと思っている。この一文を「総括 (Review)」といわずに「随想 (Essay)」としたのは、自由に曲がり道や寄り道をし、自分の思うままに論を展開したいという私自身の希望である。そうしなければ、書きにくい事もあるというのが私の実感である。曲がりくねり、寄り道しながらの私の研究の道程は、お読みくださる方々にはわかりにくいかもしれないけれども、しばらくお付き合いをお願いしたい。

私がこれまで一貫して研究してきた、ドイツのカトリック系女流作家、ゲルトルート・フォン・ル・フォール (Gertrud von le Fort, 1876-1971) の作品に出会ったのは、大学3年生のときであったと記憶している。私の恩師、故木村宇一先生 (京都府立大学教授) が私にこの作家を紹介し、「君、やらないか」とおっしゃられたのが発端である。私はその頃、京都府立大学のドイツ文学専攻の講座に所属し、4年生になれば卒業論文を書かなければならないけれど、自分の研究したいと思う作家がみつかっていなかった。木村先生がおっしゃるなら、短い小説だし、一度研究してみてもいいかなと思った程度であった。短いといっても小説としては中篇であるから、それなりの量はあったが、木村先生にいただいたのは教科書版になったものであり、註も丁寧についていたので、軽い気持ちで読みはじめたのである。それは、ル・フォー

ルの『海の法廷』 (Das Gericht des Meeres, 1943) という作品であった。読んでみて、私はこの作家に強く惹かれた。緊密な文体と厳しい内容がぴたりと合い、それでいて、フランス・ブルターニュの伝説を取り入れていて、ロマンの香りあふれる内容であったからである。作品の内容は次のようなものであった。

主人公はアンヌ・ドゥ・ヴィトレという少女である。彼女はブルターニュの貴族の生まれで、国王の王子に仕え、彼の年若い乳母のような役割を果たしていた。ところが、国王が亡くなった後、王位を狙う叔父によって、アンヌの仕えた王子は殺害されてしまう。その後、亡くなった兄に代わって王位を継いだ叔父とその妻、彼らの幼い息子が海を渡り、母国 (イギリス) へ帰ろうとすると、海が凪いで船は進まなくなり、叔父の息子である幼い王子が不眠病となってしまう。これはブルターニュの古い言い伝えによれば、海が超自然の神のごとき存在として、殺人者である現在の王に裁きを下し、彼の息子の命を報復として求めているのであった。乳も飲めず眠れず、死を待つばかりの王子を救うために、アンヌは王子の母である王妃からブルターニュに伝わる不思議な子守唄を歌うように依頼される。その子守唄は最後まで歌い終わると聞いている人に死をもたらす、最後まで歌わなければ、聞き手に心地よい眠りをあたえるという言い伝えのある子守歌であった。これを知っている前国王の臣下ビュードックは、アンヌに子守唄を最後まで歌い、幼い王子を殺害するよ

う強請した。殺された主君の敵をとるためであった。しかし、アンヌは幼い王子が哀れで殺すことができず、心地よい眠りを与えて命を救ってしまうのである。そのため、アンヌはビュードックに裏切り者として海に沈められ、殺されてしまった。しかし、海に沈められたアンヌは自分を救ってくれる、海とは違う超自然の何者かに出会う。海はひたすら正義の実現を望んだが、その何者かはアンヌの行為を良いことと認め、彼女に新しい命を与え、彼女を死から救ってくれるのあった。

ル・フォールは読者に難しいという気持ちを起こさせずに、小さな病気の子供に対する憐れみの情に訴える方法で、自分の主張を表現していた。ル・フォールの主張は、自分が不正な行為を受けても、復讐したのでは何も始まらない。むしろ愛を持って互いを救い合わなければならないというものであった。しかし、勿論ただ救すというのではなく、加害者である現在の王も王妃も自分の犯した罪を認め、良心の厳しい呵責の念に苛まれた後に初めて赦されるのであった。この赦すという境地にいたるまでの復讐心に燃えたアンヌと子供の命を救いたがために彼女の憐憫を請う王妃との心の葛藤、また、あくまでも正義と復讐を求めるビュードックとアンヌの心の闘いが、この小説の内容のすべてとあってよかった。受けた被害への復讐に燃える正義の立場とそれを超えて相手を赦そうとする立場と、この正反対の立場の二人の人間が命を賭けて闘いあい、やがてその闘いのなかから、神の救いが表れる。このような、二者の主義主張を闘わせるというわかりやすい形式と、最後にル・フォールが用意していた超自然の神、ここでは明らかにキリスト教の神の愛によってアンヌが救われるという結末に私は惹かれた。そして、そこに描かれたキリスト教の愛の精神、すなわち目には目をという正義の主張を超える寛容の精神に惹かれた。これが、私がその後何年にも互って追求することになった、ル・フォールとその信奉するキリスト教との出会いとなった。

私はこの作家の愛の精神を人間一般の真理として理解するとともに、なぜ、彼女がキリスト教に帰依することができたかを不思議に思い、これを研究課題のひとつとして追求した。なぜなら、ル・フォールの作品内容には、日本人で仏教徒である私には到底理解できないような、キリスト教の神からの人間に対する厳しい要求が表現されていたからである。その要求とは、人間としての理性も意志も、場合によっては命もすべて捧げて、神の命に従うということだった。自分の意志も理性も命もすべてを捧げるという精神状態は私には理解できなかった。当時私は、無神論的な書物の影響を受け、芸術至上主義的な意見を持ち、文学者は精神的に何者からも自由であるべきであるという妄想に憑かれていた。自由であるべき文学者が、私から見れば人間の自由を制約するように思われる宗教を信じるとはどういうことか、を探求するのがその後の私のライフワークになったのである。鈍重な私は、この点がなかなか納得できないまま、研究生活の最後までこの作家に拘ることになった。

1 キリスト教の重荷

ル・フォールを研究する際に問題となったことは、まず第一に、その文学と彼女のキリスト教信仰との関係であった。それは研究資料とした彼女のエッセー「キリスト教文学の本質について」のなかに、キリスト教と彼女の文学の密接な関係を示唆する文章があったからである。その内容は概略次のようなものであった。

古来の偉大な文学は、その作者がいかなる信仰を持つかに関係なく、内容的に言って、常に不幸、苦悩、挫折、罪業など、およそ世俗の価値基準からはマイナスとされるものの側に立ち、それらを抱擁しつつ、その最後を見届けるが、他方、キリスト教は定式化して言うと、挫折し、破滅した世界をそのままに認め、同時にこの挫折し破滅した

世界を愛するものである。この互いに類似した有り方から見て、文学は完全にキリスト教化されてはいないが、キリスト教的なものをもともと指向する存在である。いわば文学は救世主待望的な魂を信奉し、そこからこそ尽きせぬ真正の文学が生まれるのである。

すなわち、キリスト教の精神と文学の精神のうちに、ひそかに似通うものがあるのではないかとル・フォールは言うのである。

現在であれば、この言葉は彼女の精神発展においてキリスト教の果たした役割の大きさを表すものとして素直に捉えるだろう。また、同時にキリスト教の宣教やその信仰への理解を深めるために、文学が長い間大きな役目を果たしてきた事実を思い浮かべるであろう。そして、ドイツ中世時代の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』のように、内容的には悲劇的復讐譚でありながら、キリスト教的精神基盤の上になって創作された作品や、ダンテの『神曲』、神秘主義者アヴィラの聖テレジアの体験を記した『靈魂の城』や『完徳の道』、十字架の聖ヨハネの数々の詩篇などの宗教的であると同時に文学的でもある作品を思い浮かべるであろう。しかし若い頃の私には不可解な言葉であった。宗教であるキリスト教と文学は本来異なった役割を持つものであるべきだと私は考えていたからである。少なくとも文学は人間の真実を映すという役割を持ち、その真実のなかには悪もまた存在していたし、それを書くことが正しいことでもあると私は思っていた。しかし、私は宗教というものは、悪を赦さず、排除するものであると思っていたので、キリスト教が文学と結びつく理由が理解できなかった。ひょっとすると、キリスト教の教えのなかに、本当にル・フォールが言うような考え方があるのかもしれないと思った。それゆえ、キリスト教の教義や歴史について、概略でも知らなくてはならないと考えたのである。

実際にはこの検証作業は、キリスト教の歴史を学び、幾つかの派に分かれた現在のキリスト教の

うち、ル・フォールが信仰していたカトリックと、彼女が先祖以来信奉してきたプロテスタントの教義の違いを書物で学び、比較検討することから始まった。当時、私の卒業研究に助言をしてくださっていた、京都府立大学の大城功教授が、そんな私を見て、「これをずっと続けたら、あなたは大学者になりますよ」と揶揄されたほどであった。しかし、ル・フォールは明確に、彼女の文学がキリスト教と深く結びついていることを表明していたので、それを検証しないままにするということは、私としてはできなかった。文学とキリスト教を、わざわざ結びつけているのであるから、その結びつきのあり方を自分なりに解明し、理解できなければ、文学作品そのものも研究し、理解することはできないと思い込んだのである。しかも私自身がキリスト教の信者でもなく、その教義や歴史についての知識もなく、文学とキリスト教の相違も明確ではないという状況下で始めたのであるから、無謀としか言いようがない。

いま思えば、ル・フォールが述べた言葉は、ヨーロッパにおいてキリスト教が布教されて以来、たとえば古代・中世の教父たちが時代に応じて、聖書や教義について様々な研究と解釈を行い、信者たちを導いてきたのと同じく、ル・フォールが同時代の人々に、自分の文学的背景となっているキリスト教精神をわかりやすく伝えるための言葉であったのだろう。しかし、長い間私はそのことを認めようとしなかった。私は最近になって、偉大な先達である相良守峯氏の『ニーベルンゲンの歌』の解説を読み、ドイツばかりではなく、ヨーロッパの文学全般の歴史において、キリスト教宣教のために文学が果たしてきた大きな役割を知るとともに、キリスト教と文学が一体化した長い歴史について目を開くことができ、納得できた。特に言葉の威力を思い知った。そして、ル・フォールが、同じく彼女のエッセー「両親の家」において、彼女の父が「ドイツという国を超えて、ヨーロッパという視野のもとに眺める」という広いものの見方

をしていて、そのことが彼女の考え方に大きな影響を与えたと述べていたことを、実感を持って理解することができた。

そのような理解の視点を私に与えてくれたのは、ル・フォールが『海の法廷』において、描写したブルターニュ伝説であった。ブルターニュ伝説は、現在のヨーロッパ人の祖先ともいえるべき、ケルト人の残した神話・伝説にその起源があると言われている。現在はフランスに属しているブルターニュは、その名前があらわすように、もともとはブリトン人（現在のイギリス・ブリテン島に住んでいた人々）が移住して住んでいた地域であった。その神話や伝説はヨーロッパ各国に残り、のちにル・フォールを含め、各国の多くの詩人や文学者の創作の源となった。特に19世紀にはその伝説や神話から題材をとった、ケルト風の趣を持つ作品が、特にアイルランド系の作家たちによって創作された。このケルト民族的な趣を持つ作品は、ドイツにおいてもル・フォールによって、創作されていたわけである。

キリスト教の長い歴史のなかで、ル・フォールの文学を解明する上で必要な時期、背景部分のみを押さえればよいと、私は当初思っていたが、やがてそれは大変なことであるということがわかった。教会の歴史、教義の変遷、社会に及ぼした影響、いずれをとってもそれぞれが専門の学者の研究領域であり、全体を把握することは、到底無理であることはしばらくしてわかった。しかし、それらはル・フォールが彼女の文学作品の中で展開した内容の理解には欠かせない要素であったから、私はまず、当時の社会状況とそこにどのようにキリスト教が関わりを持ったかを調べ、それがどのように彼女の文学に影響を及ぼしたかを知ろうとした。その結果、主にプロテスタントの文献資料を読むことになった。当時手に入れたカトリック側の文献資料が、ナチスの教会政策に関する説明、特に1933年に結ばれた政教条約（コンコルダート）についてのみに偏っていたので、現実社会で

の状況がよく理解できなかったからである。ただ、ワイマール共和国時代は比較的平穏に終始したカトリック教会と国家の関係が、ナチスが1933年に政権をとって以降悪化したこと、カトリック教会はナチスのキリスト教に対する迫害の意志を知りつつも、司教団の意見が一致せず、ナチスに対する組織だった抗議活動ができなかったことはわかった。教会は聖職者の本来の職務の保障を優先し、カトリック組織を守ることを第一に、論争と妥協を重ねて、コンコルダートを結んだのであった。第一次大戦後左傾化し、反宗教的になったドイツ情勢のなかで、カトリック教会のための法的な保証を取り付けるほうが有利であるとの判断に基づいたものであったという。しかし、それにもかかわらず1935年にはカトリック系の学校への攻撃が始まり、青少年活動や慈善事業も禁止や排除を受け、カトリック系の新聞や出版物も1938年以降発禁処分を受けた。1937年ごろにはカトリックからの離教者が多く、そのためドイツのカトリック教会は危機的な状況になりつつあった。一方、プロテスタント教会のほうは信者も増えて、その勢力は以前に劣らず大きかったのである。ただし、カトリック側からのナチスの政策への批判は行われなかったわけではなく、司教の説教や教書、教皇の回勅には明確な批判が見られた。ミュンスターの司教フォン・ガーレン伯は、あからさまにナチスを名指しで攻撃し、その内容は秘密裡にはあるが、全ドイツ、戦線、外国にまで広まったという。

私はまず、ル・フォールが文学的デビューを果たした1924年以降に焦点を当てて、キリスト教の動きや、政治的・社会的動向を調べた。すなわち彼女の文学的活動期である第一次世界大戦後から第二次世界大戦の敗戦までの時期、およびそれ以降の時期にわけて重点的に調べた。彼女の文学の基盤となり、背景となった社会の動きを探ろうとしたのである。卒業論文で取りあげた『海の法廷』（本来は『海の裁き』）のほうだが、内容から見

て正しいかもしれない)が、第二次世界大戦中の1943年出版であるため、当時のキリスト教の状況把握のために最初に読んだ書物は、雨宮栄一著『ドイツ教会闘争の展開』であった。これはプロテスタント教会の第二次世界大戦下でのナチスへの抵抗運動の経緯を書いた書物であった。この書物によって、ドイツのプロテスタントの牧師たちが信仰を護り、人権擁護のために政権党であるナチスに抵抗して、命を賭して闘ったことを私は知った。この抵抗の中心人物であったマルティン・ニーメラー牧師、非業に刑死したディートリヒ・ボーンヘッファー牧師についても初めて知った。それと同じくカトリック側の抵抗運動として、「白ばら」と呼ばれるミュンヘン大学学生シオル兄妹とその与党によるナチスへの反戦活動についての書物も手にいれ、その活動の詳細と悲惨な結末を読むことができた。そして、兄妹の死刑判決の際に彼らの父が叫んだといわれる、「(法廷の正義ではない)別の(すなわち、神の)正義があるぞ」という言葉にも深い感銘を受けた。ル・フォールは直接にはこのような運動には関わっていないが、「白ばら」の反戦活動に関しては熟知していたと思われる。なぜなら、「白ばら」グループの人々は教授カール・ムートやテオドル・ヘッカーの影響を受けていたが、彼らはル・フォールが親交を結んでいたカトリック文学刷新運動の仲間であり、共に「高地」(Hochland 1903-1941)と題する月刊誌を発行していたからである。当時「白ばら」の宣伝ビラがミュンヘンにおいて、シオル兄妹とその与党によって学内や各家庭に配布された時、そのビラを読んだ作家ベルゲングリューンが、自分の友人たちに「いいことが書いてあるから読んでみてくれ」と言って、知り合いに配って歩いた。ベルゲングリューンはカトリックの信仰を基盤にした多くの小説を発表していた有名作家で、「高地」の有力なメンバーであった。カトリックの精神に基づいて、その文化を人々に広めようとしていた「高地」はナチス政府の方針に早くか

ら警鐘を鳴らし、ヒトラーの政権掌握後も反対の立場を表明し続けたが、やがて1941年、ナチスによって発禁処分を受けた。ナチス政府はキリスト教と教会の根絶を目標として、戦争中には陰に陽に教会への弾圧をすすめ、教会の影響力を公共生活から排除しようと努力したが、民衆の心を教会から離反させることはついにできなかった。逆に、民衆は戦争以前より真剣にキリスト教会に結びついた。その理由は、1943年のナチス当局の「帝国情報」によれば、戦争が長引くにつれて、民衆の間に宗教的・道徳的支えと心の充足とを求める欲求が増大したからであり、これに応えることができたのは基本的に教会のみであったからである。そしてこうした国民の精神構造が、教会の異常な活動と巧妙な影響力との土壌を提供しているというのがナチス当局の結論であった。

ル・フォール自身も1938年以降第二次世界大戦中は「望ましからざる作家」(unerwünscht)として、ナチス政府によって危険人物扱いをされ、ナチスの文学史からはその名を消されていたという。

当時ナチスはユダヤ人の抹殺計画を加速していたが、同時にドイツ人であっても遺伝的障害を持つ子供たちや精神障害者たちもまた、社会に不要な、それどころか将来のドイツ民族の発展の害になるものとして、計画的に安楽死させようとした。そして実際に、それは実行された。やがてプロテスタントの牧師パウル・ゲルハルト・ブラウネ(1887-1954)が1940年にこれを見抜き、ヒトラーに対して建白書をしたためた。そのため彼は逮捕拘禁されたが、この安楽死作戦実行の事実、彼の行動によってドイツのキリスト教界や国民に知れわたり、ナチ当局に対する不信と不安を引き起こした。そこに表れている当時のドイツ国内の状況は、おそろしいものであった。プロテスタント教会ばかりでなく、カトリック教会からも勿論、抗議が行われた。そして多くのプロテスタントとカトリックの聖職者や修道士がその報復の

犠牲となった。当時カトリック教会は先に述べたように、ナチス政権と政教条約を結んでいたため、カトリック側の人々の反ナチ抵抗運動は教会の公的支援は受けられず、個人的な自由意志による抵抗として実行された。組織だった抵抗の記録はプロテスタント側のほうが資料が多く手に入りやすかった。ル・フォールは当時、バイエルン州の田舎町オーベルストドルフに逼塞していたが、この事件は教会側からの公式な抗議という形で公にされ、大きく喧伝されたので、彼女の耳にも届いていたことは十分推察される。私が最初に取り組んだ『海の法廷』という作品は、まさにその事件の起きた時期に書かれ、出版されたものであった。

抹殺された人々の家族や良心的なドイツ国民がこの事件について、厳しい追及と嘆きを表明したが、それと同様に、ル・フォールもまた、これを黙って見過ごさなかった。彼女は1941年に『海の法廷』の原稿を脱稿した。この作品において、一人の王子が殺害されたことを題材として、フランス・ブルターニュの伝説に基づき、その復讐譚をキリスト教の理想に従う、愛による赦しの伝説物語として描いている。しかし、結論はそうであっても、作品にはいたいけな王子の殺人という罪業に対する厳しい批判と弾劾に満ち、恐ろしい罪に慄く人々が描かれている。それは、殺人が横行する戦争の時代、そしてナチスの暴虐に対するル・フォールの強い批判であったと言っていいだろう。そして、引き続き1943年には代表作『ヴェローニカの聖顔布』第二部の『天使たちの花冠』が脱稿されている。この作品は空襲によって1944年に失われ、現在の作品はその後、残されたメモなどを用いて新たに書き直された。1946年にはこの作品は発刊されているから、彼女が大変な努力の末に再度書き上げたことがわかる。戦争中の逼塞した状況の中にあっても、彼女が創作に強い意欲と使命感を持ってその創作活動を活発化させ、代表作を書き上げたのであるから、この時期はル・フォールにとっては彼女の作家活動の頂点にあっ

た時期といえるだろう。

2. ル・フォールの現代性とキリスト教会との軋轢

こうして彼女の文学の背景を調べてゆくと、ほとんどすべてが、同時代の様々な事件や社会的に喧伝された問題を題材としていることがわかってきた。このことは彼女に関する初めての評論を書いたミュンヘン大学教授テオデリッヒ・カンブマンによっても当初から明確に指摘されていた。1920年代から30年代当時のル・フォールは、若者に人気のある、すぐれて同時代的な作家であった。

ル・フォールは現実社会に起きた最近の事件を取り上げ、それらに積極的に取り組み、読者とともにその解決を求める作家であった。しかしル・フォールは、キリスト教に対する時代の要請に応え、キリスト教改革の前衛に立とうとする意識が旺盛であるがゆえに、深く信頼していたカトリック教会とも軋轢を起こす結果になった。私がその問題に遭遇したのは、大学院の修士論文に取り上げたル・フォールの長編小説『ヴェローニカの聖顔布』(1928, 1946)を研究したときである。この作品は、彼女が1928年に上梓した『ローマの噴水』と、戦後すぐに上梓した『天使たちの花冠』(1946)をひとつの連作として構成されたものである。作品の第二部にあたる『天使たちの花冠』の内容について、カトリック教会から、異端であるとして、厳しい糾弾の声があがり、この作品は信者に悪い影響を与えるので、禁書にすべきであるという意見が出された。もしこの意見が通っていれば、私たちはこの書物を手にすることは困難であったろう。ル・フォールはこのことを非常に遺憾に思ったようである。特にフィクションである小説と現実を同じ視点から見るということを残念に思ったようで、「私という一人称で小説を書いたのは、自分の精神とこの小説の登場人物の精

神が非常に密接に結びついているからであって、自伝ではない」との趣旨の意見、すなわち現実とフィクションは異なるものであると発言し、柔らかい口調ながら教会に対して抗議をしている。

ここで問題となったのは、第一次大戦に従軍し、敗戦と祖国の崩壊、それによる幻滅と虚無とを味わった、恋人エンツィオに対する主人公ヴェローニカの状態であった。エンツィオは、悪魔的・狂信的な国家主義者となり、ヴェローニカが何の迷いもなくキリスト教を信じている姿に、救いのない状況の自分と比較して、彼女と神に深い嫉妬と怨恨の感情を抱いている。ヴェローニカは不信と虚無に生きる恋人の苦しい心を慮り、神が決して彼を見捨ててはいないことを証するために、彼への愛を貫こうとする。彼が嫌悪するので、彼女は教会でのミサを受けない。すなわち自分の救霊を犠牲にしても、恋人に愛を示そうとする。そして、教会に行こうとしないエンツィオの為に、教会を仲介としないで、神による直接の救いを求めようとする。その結果彼女は死の危機に瀕したので、エンツィオは心を動かされ、彼女への愛のために自説を曲げて教会に出向き、司祭に彼女のために臨終秘蹟を施してもらうことを願っている。そしてもし彼女が回復するならば、信仰をともにはしないが、尊敬しつつ彼女との婚姻を結ぶべく、教会が彼に要求する一切のことに同意をすることを了承する。こうしてヴェローニカは恋人の心をもう一度キリスト教に向かわせたのであった。

この内容が、なぜそれほど、教会の怒りをかっただろうか。おそらくは、教会は神の恵みを信者に伝えるために存在するものであり、その存続の意義が、この考え方によって喪われるという危機感があったためではないだろうか。ル・フォールの研究・翻訳を行った前田敬作氏はこの点について、「自分の救霊を危うくすることさえ、あえて辞さないヴェローニカの無条件な愛は、教義的には一見無謀とも思われようが、方向としてはキリスト教的愛の究極、およそ人間の愛の力の最高

の尺度というべきである」（「ゲルトルート・フォン・ル・フォールについて」と述べている。

教会からのこの批判はル・フォールの文学者としての考え方を変えはしなかったが、やはり、読者や評論家など多くの人々の理解と支援があっただけで危地を脱したと言えるかもしれない。カトリック教会は時代にふさわしい教会になることを目指して、1962年から1965年まで、第1バチカン公会議からおおよそ100年ぶりに、ヨハネ23世とその後を継いだパウロ6世のもとで、第2バチカン公会議を開催して、教会の現代化を図った。ル・フォールはカトリック教会の改革の動きに期待し、大変喜んでしたが、その時ですら、従来の路線を踏襲する保守派の力は強かったと言われている。公会議以降、ふたたび保守派が実権をにぎったカトリック教会は、現在また保守的な路線に戻っているという。現在の教皇、ベネディクト16世は公会議開催時には、改革派として会議の中心的な役割を果たしていたが、教皇となった現在では保守的な意見を持つようになったといわれる。

この騒動のときの研究資料は関西大学の新谷教授にお借しいただいた。どのような経緯で先生の元を訪れることになったかは、全く覚えていない。先生は、敬虔なカトリック信者であり、教会の事情に精通しておられ、ル・フォールに関する立派な論文を書かれていた。そのため、当時の私の修士論文執筆を指導して下さっていた義則孝夫先生（大阪市立大学教授）から修士論文に関してご相談に伺うようにご紹介いただいたのかもしれない。そして新谷先生とのお話の際に、私は先生から一つの大きな示唆をいただいた。それは、ル・フォールが跣足カルメル会の神秘主義の思想的影響を受けて、アヴィラの聖テレジアの著した『完徳の道』（1565年）の内容をそのまま文学として描写しているというものであった。ル・フォールのキリスト教が神秘主義によって影響を受けていることは、エッセー『永遠の女性』（1934）その他

にも書かれており、また彼女が中世の女流神秘主義者の伝記も書いていることから、私も彼女のキリスト教思想には神秘主義の影響があることに気づき、少しずつ調べだしていたが、先生にはっきり指摘された時、このご指摘は間違いないと納得した。先生の言葉はいわば天啓のように私の胸に響いた。それによって確信を得た私は、ル・フォールの作品の基盤となっているキリスト教神秘主義思想に辿りつくことができたのである。しかし、修士課程の段階では神秘主義の影響の詳細にまでは辿りつけず、それはその後の私の長きにわたる研究対象になった。

哲学者・神学者であり、キリスト教思想史がご専門の小田垣雅也氏によれば、キリスト教の神秘主義は神との直接的な合一を求める立場であり、救いを仲介する組織としての教会を、原理的には必要としない。したがって、教会が活力に満ちているときには盛んになりにくい思想であるという。この思想は教皇庁の衰退と退廃によって、それまでの統一的秩序が崩れた中世末期にもっとも高度なものとなった。神秘主義は現実的には、激動と苦難の社会状況を背景として現れ、「現実の苦しみに耐え、神と直接結びつくことを理想とする」教会刷新運動、いわば従来の教会の教えや在り方に飽き足らない信者による自発的な教会刷新運動であった。小田垣氏によれば、神秘主義は人間の認識が成立する以前の、主観—客観未分の根源を求めるものである。しかしそれを求める場合、当然人間の認識を捨てることが要求されるし、そもそも神を求める心すら、それらが人間の認識を前提としている以上、捨て去ることを求められるという。人間が神を求めている以上は神と人間の区別が前提となっているからである。それゆえ、神秘主義者マイスター・エックハルトは「人間が神を求めるといふ信仰にとって根本的な必然をも棄て、我を捨て、自己から離脱したときに神は理解され、人間と神は合一する」と述べた。しかし、ル・フォールが教会から厳しく批判されたよう

に、エックハルトも晩年宗教裁判にかけられ、死後、彼の著書は禁書となった。神秘主義はカトリック教会にとっては、本来、異端的な思想なのであった。ドイツではプロテスタントの創始者であるルターも思想的に神秘主義者タウラーの影響を受けたと言われる。やがて神秘主義は「ドイツ神秘主義」として独自の発展を遂げていった。それがなぜ20世紀になって、再び取り上げられたのか。この古くからある信仰運動は現代においてどういう意味合いがあるのかと、私は自問した。ル・フォールは元来、現代的な作家であるはずであったし、敬虔なカトリック信者であるはずであったのに、一体これはどういうことであろうか。

3. 神秘主義へ向かう道

私はこの点について考察していくうちに、ル・フォールが神秘主義に興味を抱いたのは、畏友エーデイト・シュタインの思想的影響があるのではないかと思いついた。シュタイン女史はル・フォールが私淑し、その思想に共鳴していた哲学者で、後に跣足カルメル会修道女となった。女史は新進気鋭の哲学者で、ル・フォールとは、1932年ル・フォールの神秘主義の師エーリッヒ・プシュヴァラ神父 (Erich Przywara, 1889-1972) の紹介で知り合い、1933年、作家の『断頭台下の最後の女』(1931) についての討論会に参加してル・フォールに深い印象を与えた。それ以来二人は交流を深め、ル・フォールはシュタイン女史を、「理想的な真のキリスト者の女性」と考え、エッセー『永遠の女性』(1934) のモデルとした。女史はやがて跣足カルメル会の修道女となったが、そこにもル・フォールは会いに行っている。女史はユダヤ人であるため、キリスト教に改宗し、さらに修道女となったことは彼女の母にとっては大きな衝撃であったが、ル・フォールは女史の母を慰めるために、わざわざ女史の故郷へと出かけている。非常に親密な付き合いであったといえる。シュタイ

ン女史は修道院の中でも哲学者として執筆活動を続けていたが、やがてユダヤ人であることからナチスによって捕らわれて、1942年アウシュヴィッツで殺害された。女史はナチスが政権を掌握した後、ユダヤ人大虐殺にいたる未来を早くから予測し、同胞であるユダヤの民、苦しむ者、救いを待ち望む者との連帯を目指した。カルメル会に入る際に、「人間のわざは助けにはなりません。キリストの受難のみが、私たちを救うのです。ですから私の望みは、キリストの受難に与ることにあるのです」と述べたという。

しかし、1932年にル・フォールが女史に会う前の1931年に発行された作品『断頭台下の最後の女』において、もう既に、その主人公、ブランシュ・ド・ラ・フォルスは、人間としての理性も自我も失うほどに苦悩の中に埋没し、苦悩そのものと化した人間、神秘主義的な人間の生き方の類型として表現されている。それはイエス・キリストがゲッセマネの園で多くの弟子たちから離れ、一人孤独に死の恐怖と戦った苦悩に倣い、受難を引き受け、それによって人々の救いがもたらされるという、キリスト教の受難の神秘主義思想、すなわちカルメル会の神秘主義思想の表現であった。従って、ル・フォールの神秘主義的な傾向は、シュタイン女史の影響というよりは、彼女の神秘主義の師、あるいはそれ以前に知り合った人物、あるいは出来事に由来するということが推察された。

苦悩すること、それをすすんで引き受けることは、現代では負の価値を持つものであるとみなされている。それがひとつの正の価値を持つものとして扱われるという逆転の発想はル・フォールの初期の作品から一貫した彼女の特徴であった。そしてその理由については、私の疑問とするところであった。

私はそれがシュタイン女史の影響によるものでなければ、社会的な背景によるのではないかと考え、最初は、ル・フォールの同時代人が経験した敗戦によって受けた政治的社会的変動や厳しい経

済的困窮などにその理由を求めた。そしてそれは間違っていないかと思っている。ル・フォールは38歳以降、第一次、第二次世界大戦に遭遇し、敗戦の苦境を二度にわたって体験している。当時の人々が「自分たちは必要のない棄てられた人間である」と思っていたということを『永遠の女性』で憂えているのであるから、彼女自身もなんとかしてこの苦境を乗り越えるために、この苦境を意味ある生にしたいと思ったに違いない。ル・フォール自身も多くの人々と同じく、厳しい体験を味わったからである。敗戦により、ドイツ帝国は崩壊し、新たにワイマール共和国が生まれたが、その国家体制もまた動揺していた。彼女の家族は崩壊した帝国の支持基盤となっていた土地貴族（ユンカー）であったから、ル・フォール家の跡継である彼女の弟は、もちろん、滅びた帝国の復活を切実に望んでいた。彼は当時成立したばかりの左翼系の州政府への反乱を企てたカップの一揆に加わり、一敗地にまみれて、亡命生活を送った。一方、その間留守を守っていたル・フォールは、家屋敷や領地を州政府に没収されてしまったため、一時は母方の親戚に引き取られる羽目になった。彼女にとってみれば、第一次世界大戦でドイツが敗れたことはひとつの時代の終わりであり、これまでの順風満帆の人生では思いもつかなかった激動の時代に、いわば革命と言ってよい時代に放り出されたようなものであった。ル・フォールの父は男爵で、敗戦したドイツ帝国を支えた軍人層の出身であった。帝国宰相であったビスマルクとも親しかったという。日本で言えば、彼女は明治維新で崩壊した江戸幕府の一員のような立場であったろうか。家屋敷から追い出され、生活の基盤を失ったル・フォールは経済的にも困窮したはずである。ただ、ル・フォールにとっては幸運なことに、やがて亡命していた弟の罪が赦され、しばらく後に屋敷や領地も返還されたので、経済的な困窮からは当面免れたのである。

4. トレルチの影響

この時代に彼女の精神的支えになっていたのは、彼女の恩師エルンスト・トレルチ (1865-1923) であった。ル・フォールは 11 歳年上のこの著名なユダヤ人神学者・哲学者を尊敬し、ハイデルベルク、ベルリンと彼が大学を移るのにあわせて、ともに移動し、その教示を仰いでいた。後に彼の遺作として、彼女は同級生の助けと未亡人の許しを得て、大学でのトレルチの講義録を、『信仰論』(1925) と題して出版した。この書物は人々の関心を引かず、ル・フォールの失望は大きかったと思われる。しかし、1976 年にトレルチの神学的ドキュメントとして、ブライアン・A・ゲリッシュが『信仰論』を取り上げ、その後、その弟子、ウォルター・E・ワイマンの本格的な研究によって、『信仰論』に対する関心が高まり、トレルチの神学者としての再評価がなされた。この書物はトレルチの「神学者としての評価を決定的に左右する」とまで評され、その資料的価値を認められたのである。こうして彼の思想の解明に大きな寄与をなす書物として、発刊以来初めて、『信仰論』は陽の目を見たといってよい。私は、ル・フォールがこれほどまでに傾倒した師であり、恩人であるトレルチの思想から受けた影響はどんなものか、知る必要があると考えた。彼女のエッセー『人生の半ば』(1965) の記述では、トレルチは神秘主義者ヤーコプ・ベーム (1575-1624) に心酔していたと書かれていたからである。ル・フォールがキリスト教神秘主義に入ってしまったのも、彼の神秘主義への愛着を受け継いでいたとも受け取れる節があった。しかし、トレルチの書物は難解であり、なかなかル・フォールとの接点は見出せなかった。ただ、営々と積み上げてきたドイツの伝統文化を後世の人々に伝えていくという意識は、二人に共通していた。この意識は彼女の前述の作品『ヴェローニカの聖顔布』の第二部にあたる『天使の花冠』において、はっきりと主人公ヴェローニカに

よって宣言されていた。未来の人々とのつながりを失い、文化の断絶を懼れる後見人に対して、主人公ヴェローニカは「私の心が橋となって、私自身を向こうに渡すでしょう。橋はこの(目の前の)橋の様に強くて、活気に満ち、決して壊れません。私にとって価値あるものすべてを私は忠実に向こうへ運びます」(『天使の花冠』274-275) と宣言する。この伝統文化を渡す「橋」のイメージは師弟に共通していた。トレルチの遺著『歴史主義とその超克』(1923) には、同じように、橋による伝達というイメージが語られているのである。そのほか、この著作においてトレルチは、ドイツ中世のカトリック・キリスト教世界において、民族を超えた普遍人間的な宗教世界が存在し、そのもとにキリスト教諸民族が一家族をなしていたことを述べていたが、このような考え方は、キリスト教各派の宥和の下での文化と国の復興を願っていたル・フォールにも明らかに共通しているものであった。トレルチの思想は、いわば、彼女の思想の原型ともいえる内容であった。ル・フォールは友人に送った手紙でも、自分がいかにトレルチの思想の恩恵を受けたかを、強調していた。トレルチはカトリックに非常に好意的で、学生たちに「先生は僕らにカトリックになれというのか」と冗談で言われたほどであったとル・フォールは「半生記」において述べている。このことを考えると、彼は知らず知らずにル・フォールのカトリック改宗への道しるべとなっていたのかもしれない。彼自身は改宗しなかったが、弟子であるル・フォールが、やがてカトリックに改宗するだろうと予測していたという。

幸運なことに、1997 年にル・フォールがトレルチのために出版した『信仰論』の日本語の翻訳が完成し、その本が手に入った。これは翻訳者安酸敏真氏 (当時聖学院大学教授) の非常な努力の末の研究成果であり、その懇切な解説なしには、たとえ日本語であっても読みこなせないものであった。しかしこの書物によって、私はトレル

チが神秘主義の講義に多くの時間を費やし、ル・フォールのキリスト教神秘主義的思想への接近への足がかりを作ったことを確信した。

トレルチの神秘主義はプロテスタントの著名な神秘主義者、ヤーコプ・ベームの影響を受けているということなので、その思想を知る必要はあると思い、その著書も蒐集しているが、現在まだ、手をつけていない。今後の課題である。

一方、ル・フォールは1925年に、当時キリスト教系の雑誌「時の声」(«Stimmenn der Zeit»)の編集者としてミュンヘンに滞在していた、イエズス会所属でポーランド出身のカトリック神学者エーリッヒ・プシュヴァラ神父に師事して、キリスト教神秘主義について学びはじめている。彼女は後に、彼によってカルメル会の神秘主義思想に導かれたことを感謝している。その成果であろうか、1927、1928年に中世の女流神秘主義者ヒルデガルト・フォン・ビンゲンなど複数の女流神秘主義者の伝記を著している。私はこのことから、トレルチはル・フォールの思想的精神的な基盤をつくった人物であるが、直接的には後に学んだ跣足カルメル会の神秘主義の思想によってル・フォールが影響を受けたという結論を下した。ただ、プシュヴァラ神父自身は、先述のエーディット・シュタイン女史の思想の影響を強く受けていたと言われるから、結局は私の最初の直感どおり、シュタイン女史がル・フォールを導いたということになる。

そして、ル・フォールが人々の救いのために受難や苦悩を引き受けることを旨とするキリスト教神秘主義を自らの文学の精神的基盤として選んだのは、やはり、彼女の生きた時代、すなわち大きな戦争が続いた時代の社会的な状況が関わっており、第一次世界大戦敗戦後の精神的・経済的苦境、第二次大戦で明らかになったドイツ民族の精神的墮落にその理由があると私は思った。さらにドイツ国民が二度の敗戦の痛手から立ち上がり、生きていくためには、愛と慰めを必要としていたとい

うことが最大の理由として挙げられると思った。私はドイツにおいて、私と同じ世代とそれ以上の年齢の人々から「私たちには当時ル・フォールの文学が必要だった」という言葉を聞いたことがある。彼女の文学が人々に喜んで迎えられた理由は、ル・フォールが、罪ある人間に対する神の無条件の愛と憐れみを示唆したからであろう。戦争前後の厳しい時代には、多くの人々が心の痛手を負い、それを癒すことが先決であったと推察される。そして、ル・フォールにとっては、人心を癒し、ここを一つにして国家を再建することが、その当時は最も重要なことと思われたのであろう。このことは、彼女の作品中に戦争によって心に痛手を受け自暴自棄になった若者や、敗戦を受け入れられずに他人、すなわち「国内の裏切り者」に敗戦の責任を転嫁する若者がしばしば登場することから推察できる。「国内の裏切り者」というのは、第一次世界大戦末期に勝ち目のない戦争に怒り、国内で反乱をおこしてドイツを敗戦という結末に導いたとして非難されてきた兵士たちである。彼らは戦後しばしば「国内の裏切り者」として非難され、ドイツが戦争に負けたのは彼らによって「後ろから匕首で刺された」せいであるとして、敗戦の責任を負わされてきた。これらの人々やドイツから追放されたユダヤ人に対して、ル・フォールはその作品中において、「戦争で心を病んだ気の毒な人々」「正直なユダヤ人が迫害されていつのまにか姿を消していた」といった同情的な言葉によって描写しているから、ドイツに暮らす人々の宥和を願うル・フォールの気持ちがよく理解できる。

5. カトリックへの改宗の動機

ル・フォールは1926年に、ローマにおいてカトリックに正式に改宗した。その理由は長い間私にとって謎であった。私はその理由を、上記のように、変動する社会背景に求め、国の復興のため、

人々の心をまとめるためキリスト教諸派の一致をめざしたのではないかと思っていた。ル・フォールはエキュメニカル運動に理解を示していたからである。その見方は一面的ではあるが一つの紛れもない事実でもあるので、いまでも捨ててはいない。

一方で、改宗の理由を尋ねた人に対して、ル・フォールは「一人の人間の生涯にとくに大きな意義のあったことからは、世の人々にはほとんど関わりがありません。それらは心の奥底の聖所であって、かれらのものとなることはありません」と言ったと、木村直司氏が『教会への讃歌』の翻訳あとがきで述べている。おそらく、その意義あることさらにル・フォールが遭遇した後に書かれたと思われる、彼女の処女作『教会への讃歌』(1924)に謳われている内容から見て、彼女に神からの啓示に類した内面的な体験があったということ私は理解できた。木村氏も指摘するように、その内面的体験が作家としての彼女の作品に結実しているということは、ル・フォールのように自らの精神を作品の主人公に移入するような作家にとっては間違いのないことであろうからである。そして、『教会への讃歌』に謳われているのは、人間の能力には限界があるということ、それと対照的に神は全能であるという体験であった。この処女作において彼女は、その後の多くの作品におけると同様に、苦悩と愛に大いなる意義を見出し、それを表現していた。

「わたしは、わたしの神を見出すために わたしのもっとももっとも深い苦悩のなかにはいって ico! なぜなら、この世界の中では 苦悩こそ偉大で 力強く 無限であるから。苦悩は 天と地がそれによって碎けるおん者をも抱き、永遠なる愛の重みにも堪えてきた!」(翻訳 95)「わたしは わたしの最後の慰謝をも消し去ろう。わたしのたましいがすっかりよるとなるように 主の聖体をも運び去ろう。なぜなら、地の苦悩は 愛せられたがゆえに 至福となったのであるから。」

(同書 93) そして、そこに現れる神は「おんみなやめるすべての者たちの神、死にゆくすべての者たちの神」(同書 107)であり、「盗賊や殺人者でさえも赦しを見いだす聖心(みこころ)(中略)仁慈の聖心」「永遠の愛」(同書 107)である。

そこにはデヴュー後に上梓された数多くのル・フォールの作品とほぼ同じ特質が、既に明確に現れていた。

このル・フォールの処女作は 1922 年から 1924 年にかけて、公に出版する気持ちなどなく書かれたが、偶然、友人である編集者の目に留まり、出版されたという経緯がある。そして、これが書かれた時期は、まさに彼女がプシュヴァラ神父からカルメルの神秘主義を学んでいた時期にあたる。それゆえ、ここからはル・フォールの文学的な原点にあたる神秘主義思想からの影響は窺われるが、残念ながら、改宗の理由はあまり見当たらない。せいぜい「おんみ おんみによって分裂が一つの民族(たみ)となる聖心(みこころ)、わたしたちは おんみの愛を乞いねがいます! おんみ おんみによって全世界がおんみの民となる聖心、わたしたちは わたしたちをおんみの愛に捧げます!」(『教会への讃歌』114-115)という言葉に注目するのみであった。ただ、分裂を修復し、それによって現実的にも内面的にも理想のキリスト教世界を希求する彼女の意志は明確であった。後になってル・フォールは改宗について、次のように述べている。

「改宗者というものは、まちがった解釈が時として考えますように、信仰告白上のいたましい分裂をことさらに強調するような人間なのではなく、むしろ逆に、そういう分裂を克服した人間なのでございます。改宗者のほんとうの体験は、異種の信仰を体験し、水の流れにたとえますならば、そちらへ〈乗り越えていく〉ことではなく、信仰がひとつのものであることを体験し、この同一性に水浸しにされることなのです。それは、自分の最も固有の宗教的財産——すなわち、プロテスタ

ンティズムの中核的なキリスト教信仰内容——が、母なる公会の胎内から生まれ出たものであるとともに、その胎内において保存され、安全に守られているのだということを知った子供の体験であります。したがって、極端な言い方をしますと、いわゆる信仰分裂は、究極の宗教的見地からすれば、信仰の分裂であるよりは、むしろ愛の分裂であり、信仰の分裂の神学的克服は、それに先立って愛の分裂がすでに克服されていないかぎり、けっして成功するはずがないということ、この輝かしい認識こそ改宗者の真骨頂なのであります」（「手記と回想」）

そして、彼女がそのような実感を得たのは、カトリック系月刊雑誌「高地」に出会ったときであった。「高地」は、ドイツのカトリック信者の精神的芸術的生活を反映し、現代の抱える問題を討議することを目的に、カール・ムート（1867-1944）によって創刊された。そして、この雑誌は文学と思想の領域におけるカトリシズムの復興運動を推進し、カトリック信仰とヨーロッパ近代文化との和解を目指し、第一次大戦後は新しい国家の形成と秩序の回復にキリスト者が積極的にその責任を担うことを提唱していた。ル・フォールが「高地」に出会った1924年ごろは、「西洋の没落」や「ドイツ民族の没落」という言葉が人口に膾炙していた。それに対して「高地」では、ヨーロッパやドイツの復興を信じる論調が主流であった。彼女が「高地」に出会ったときの喜びの言葉を聴けば、そのことが理解できる。

「わたしはカトリック雑誌の精神的領域にいましたが、同時にわたし自身の故郷にもいました。（中略）むしろこの雑誌の態度全般がわたしの最も大切な財産、すなわちわたしの敬虔なプロテスタントの両親の家の遺産をいわば一緒に包含しているように思われたからでした。実際、まさにこの包含するものという印象、（中略）こそがこの忘れがたい出会いの本来の本質だったのでした。わたしはその当時はじめて、キリスト教内部の痛ま

しい対立や分裂にもかかわらず、キリスト教文化の共同の財産があるのだということを確認に体験したのでした。わたしは一冊のカトリック雑誌の精神的態度を普遍的なキリスト教的精神態度、愛の態度として体験し、カトリック的なものの包容的な母性的な態度を体験したのでした。」（「手記と回想」）

ここでル・フォールの見た互いに共通する財産というのは、彼女が母から教えられた「永遠に続く神の愛の啓示」であった。彼女はプロテスタントの原点をカトリックに見出し、決然と改宗に踏み切った。そこには異端としてしばしば排撃された跣足カルメル会の苦悩の神秘主義も包含されていた。いわば、さまざまな考え方の人々が集うひろやかな世界というのが、本当の意味でのル・フォールの体験であったかもしれない。「ル・フォールがカトリックに惹かれたのは、その広さですよ」とキリスト教文学を全般的に研究しておられた大谷恒彦教授（九州大学名誉教授）に教えていただいたことがある。確かに、ル・フォール自身は両親のおかげで宗派に拘らず自由な雰囲気の家でのびのび育てていたが、文筆活動を行うことに対して、彼女の若い頃に親戚から憂慮の念を示されるなど、彼女の属していた改革派プロテスタントの一部に文筆活動を罪悪視する傾向があったことは事実である。

しかし文学に対する無理解な動きは『ヴェローニカの聖顔布』第二部に関しての禁書騒動の場合のように、カトリック側にも多々あり、このことは宗派に関わりなく起こる可能性があることである。ル・フォール自身は前述のエッセーで書いているように、祖先伝来の宗派を愛し、その母体としてカトリックを愛していたことは疑いが無い。それゆえ、大谷先生の主張されるカトリックの広さのみに、彼女の改宗の理由があるとは私には考えられなかった。むしろ、「高地」がキリスト教精神に基づく文学の創作を提唱し、キリスト教精神こそが文学を創生する源であるとしていたこと

が、改宗の動機だったのではないかと、私は推察している。

近頃私は、彼女が改宗に至った過程には、彼女の両親の影響があったのではないかと考えている。彼女の父がヨーロッパ全体を一つの世界とみなす広い視野を持ち、母もまた宗派に拘らない態度を示していたことに、彼女が改宗に踏み切ることができた理由の一つがあるのではないかと、彼女の母は夫が亡くなった後、傷心を癒すために娘たちとローマに滞在していたが、その当時のローマ教皇ピウス 10 世に謁見し、彼を聖者であると認め、大変尊敬していた。このような宗派に拘らない母の態度がル・フォールの改宗の後押しをしたものと推察している。

同時に文学的な面でも、ドイツ中世の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』（1200 年から 1205 年の間に成立）を読んで私なりに気づいたことがある。ル・フォールは、このようなロマンチックな王朝物語をキリスト教の長い歴史とその影響を背景に、書きたかったのではないだろうか、という思いである。『ニーベルンゲンの歌』では、古代の伝説が素材として用いられ、キリスト教的な歴史観のもとにドイツ民族の英雄叙事詩が創作された。ル・フォールもドイツの最も輝いていた中世ドイツ王朝の盛衰をキリスト教的歴史観のもとで描きたかったようで、1937 年に、おそらくは長大な作品の一部となるはずだった『テレースの小鳥たち』という小説を創作している。しかし、文学者としてのル・フォールの見果てぬ夢は、第二次世界大戦後に潰えた。ナチスの暴虐をみてきたル・フォールは、ドイツの歴史を礼賛するような作品、中世の光り輝くドイツ王国を礼賛する作品を書く意志をみずから断ったのである。残った短編『テレースの小鳥たち』の内容は、彼女独特の逆転の発想によって、王位が受け継ぐべき力のあるものの手に神の采配によって必然的に移っていくというものであった。西洋中世が背景であるから、この作品の背景となるのはカトリック教会で

ある。エッセー『永遠の女性』におけるル・フォールの言葉によれば、カトリックの長い歴史と伝統はこれまでのヨーロッパのすべての文化や芸術の基盤となったものであり、その事実を無視することは到底できない。ヨーロッパ文化の原点であるカトリックの影響の大きさを素直に認めていくことが、彼女の文学の出発点であったと言えるだろう。

いずれにせよ彼女の理想とする愛の精神が充満する、「高地」の寛容な翼のなかで、キリスト教的な愛とロマンの花をその作品の中で咲かせることが彼女の夢だったことは間違いないであろう。

6. ヨーロッパ文学の源流と現代

2009 年後期、私は本学での「文学」の講義を行っている。その際、前述のドイツ文学の最古の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』をとりあげた。美男美女の結婚話や恋愛話を大いに楽しみ、女主人公クリエムヒルトが前夫ジーフリト殺害の復讐のために、親戚・肉親を皆殺しにする凄惨な合戦場面に辟易した。そして、これが実は婚姻を聖なるものとするキリスト教の影響の下に書かれたものであることに相良守峯先生の解説によって気づいたのである。歴史的事実では、叙事詩とは反対に、肉親の仇を討つために現在の夫エッツエルを殺したと伝えられるが、それが逆になって、聖なる婚姻を結んだ夫のために、クリエムヒルトはわが子も騎士たちも犠牲にしたのであった。この有名な叙事詩の最後の言葉は「ニーベルンゲンの災いである」（「これがニーベルンゲンの歌である」という最後のものもある）というものであった。この言葉に私はル・フォールの「文学とは悲劇である」という言葉を重ね合わせて、感慨を深くした。民族の悲劇の描写の中に文学の萌芽を見出すという、そういう文学を描かざるを得なかったドイツ人の悲劇的な近代を思わずにはいられなかったのである。

しかし、ドイツの経済発展とともに、そのような悲劇のあとは消えていったと私は思っていた。一般のドイツ人の意識もまた、そのような負の遺産からは関心が薄れていったのだと考えていた。少なくとも数年前まで私はそう思っていた。しかし、1995年出版され、世界的ベストセラーとなったベルンハルト・シュリンク（1944-）の『朗読者』（1995）には、私が既に忘れ去られたと思っていた、第二次世界大戦中のナチスの時代がよみがえっていた。この小説には、ナチスの政策と命令によって、罪を犯さざるを得ず、その結果、人生を失った一人の不幸な女性の話が描かれていた。それは恋愛小説であるが、その背景には、明らかにドイツ人がもう忘れてしまったと私が思っていた、暗黒のナチスの時代の片鱗が現れていた。勿論、その描き方はル・フォールの時代とは大きく異なり、集団的体験ではなく、主人公、加害者、被害者の個人的な体験になっているが、そこに表れている歪な時代の息吹は残されていた。筆者のシュリンクは現在65歳。ちょうど私より少し上の世代である。大戦中に生まれてはいるが、厳しい時代の経験は聞いて知っているという世代である。この点に私は、彼がこの恐ろしい時代の話題を取り上げる最後の世代ではないかという感慨を持った。ドイツでも、ヨーロッパ各国でも第二次世界大戦中の戦犯が発見され、裁判を受けることは少なくなってきたとはいえ、戦後60年以上を超えて、今尚継続している。

さらにこの講義において、ヨーロッパ文学の源流であるケルト神話やケルト系の文学を取り上げたことで、ひとつの面白い発見があった。私はル・フォールの文学を主にキリスト教の影響からのみ考察してきた。しかし、『海の法廷』を読んだときに、作品中でブルターニュの伝説、あるいは伝説と称する物語が、前王の後継者の殺害という事件の禍々しさを効果的に読者に訴える効果を上げていることに気付き、この手法に興味を抱いた。神話的・伝説的素材を用いて恐怖に満ちた体験を

読者に伝えようとする手法をル・フォールは、しばしば用いている。自らの作品に「伝説」(Legend)と副題を付け、実際に、作品内容も伝説や神話に類する内容の作品がル・フォールの場合かなりあるのである。この点について、ル・フォールは「物事は少し距離をおいて離れて見るほうがよい」ということを述べている。そのほうが起きていることの本質を見誤らず、冷静に客観的に判断ができるということであろう。伝説と言う形態は、広い歴史的視野のもとで物事の本質を見究めようとする意志と文学者としてロマンを失うまいとする意志が、ル・フォールの中で一つに結実し生み出された形態であろうと、私は推測している。

ドイツ文学に限らない。たとえば、現在『ハリー・ポッター』のシリーズが世界的に人気を博しているが、この児童書の内容については『アーサー王物語』の影響があるのではないかとされている。しかし、実はそれ以前のケルト神話が、アーサー王物語の内容に影響を及ぼしているから、もとを正せば、ケルトの神話的内容がこの児童書の内容の創造に影響しているのではないかと思われる。たとえば、魔法使いの杖、魔術を使っての変身などは、実はケルトの神話に出てくるドゥルイド僧の行動、ドゥルイドの一族の人々のそれによく似ている。彼らはキリスト教が布教される前、未開民族のシャーマンのように、予言をし、神に生贄をささげ、政治の中核にあって王の顧問として進言し、いわば現実的に政を行っていたという。魔術を使い、魔法の歌を使って、人々を動物や鳥に変身させ、殺し、自分たちも変身したという、この古代の伝説が『ハリー・ポッター』に至るまで、連綿と受け継がれてきたことの重みを思わずにはいられない。ル・フォールの『海の法廷』にも、魔法の歌によって多くの兵士を眠らせ、その命を奪ったという主人公アンヌの祖母の姿が描かれていたので、ドゥルイドの魔法を伝える、ケルトの伝説がそこに息づいている思いがした。

私はル・フォールの文学の世界を、長い間キリ

スト教の神の愛に満ちた理想の世界を示唆するものと思って研究してきた。しかし、それは同時に「物語」の世界でもあったのではないだろうか。キリスト教の愛の世界に、ロマンを息づかせようとしたル・フォールは、実際には志とは違って、厳しい苦難の時代を生きることになった。そして、そこに苦難のロマンの花を咲かせたのである。そして、私は今やっと、これまで主にキリスト教に向けていた目を、ル・フォールの文学の世界にも向けることができるようになったのである。

終り

参考文献

- 1) ヨーロッパキリスト教史6（現代），糸永寅一他監修，（中央出版社）昭和46年。
- 2) Gisbert Kranz: *Gertrud von le Fort. Leben und Werk in Daten, Bildern und Zeugnissen*, (Insel Verlag) 1976.
- 3) Gertrud von le Fort: *Das Schweiß Tuch der Veronika Teil II, Der Kranz der Engel*, (Franz Ehrenwirth Verlag KG München) 1963.
- 4) ゲルトルート・フォン・ル・フォール（前田敬作・船山幸哉共訳）：教会への讃歌，（ヴェリタス書院）昭和35年。
- 5) 河島幸夫：戦争・ナチズム・教会，（新教出版社）1993.
- 6) 雨宮栄一：ドイツ教会闘争の展開，（日本基督教団出版局）1980.
- 7) 雨宮栄一：ユダヤ人虐殺とドイツの教会，（教文館）1987.
- 8) F. W. エッゲベルト（横山滋訳）：ドイツ神秘主義，（国文社）昭和54年。
- 9) ドイツ神秘主義研究，上田閑照編，（創文社）昭和57年。
- 10) Gertrud von le Fort: *Die Ewige Frau. Die Frau in der Zeit. Die Zeitlose Frau*, (Im Kösel-Verlag zu München) 1960. (翻訳) ゲルトルート・フォン・ル・フォール（永野藤夫・磯見昭太郎共訳）：永遠の女性，（ヴェリタス書院）昭和33年。
- 11) 須沢かおり：エディット・シュタイン 愛と真理の炎，（新世社）1993.
- 12) Gertrud von le Fort: *Woran ich glaube und andere Aufsätze*, (Verlags AG Die Arche, Zürich) 1968.
- 13) Gertrud von le Fort: *Hymnen An Die Kirche*, (Ehrenwirth Verlag München) copyright 1924 by Theatiner Verlag) 1961.
- 14) Gertrud von le Fort: *Hälfte des Lebens. Erinnerungen*, (Ehrenwirth Verlag München) 1965. (「半世紀」)
- 15) E. トレルチ（安酸敏真訳）：信仰論，（教文館）1997.
- 16) Arthur Maximilian Miller: *Briefe der Freundschaft mit Gertrud von le Fort*, (Maximilian Dietrich Verlag, Memmingen) 1976.
- 17) Gertrud von le Fort: *Die Erzählungen*, (Insel Verlag, Ehrenwirth Verlag) 1966.
- 18) Gertrud von le Fort: *Das Schweiß Tuch der Veronika Teil I Der römische Brunnen*, (Franz Ehrenwirth Verlag KG München, copyright 1928 by Josef Kösel Friedrich Pustet, München) 1967.
- 19) *Dichtung ist eine Form der Liebe Begegnung mit Gertrud von le Fort und ihrem Werk Zum 100. Geburtstag am 11. Oktober*, Hrsg. v. Hedwig Bach, (Ehrenwirth, München) 1976.
- 20) 小田垣雅也：キリスト教の歴史，（講談社学術文庫1178）1995.
- 21) 小田垣雅也：神学散歩，（虹企画）1990.
- 22) Gertrud von le Fort: *Aufzeichnungen und Erinnerungen*, (Benziger Verlag, Zürich, Köln) 1951 (「手記と回想」).
- 23) 相良守峯訳：ニーベルンゲンの歌 全2冊，（岩波書店）1955.
- 24) 手塚富雄・神品芳夫著：ドイツ文学案内，（岩波書店）1963.
- 25) H・G・シェンク（生松敬三・塚本明子訳）：ロマン主義の精神，（みすず書房）1975.